

成的に見れば、前半部（第1章～第3章）と後半部（第4章～第6章）の対比として明らかなものの、実質的にはいささか皮肉に聞こえかねない。なぜなら、本書において「ギリシア思想」とは、ギリシア的語彙と用語法の再編に他ならないからである。このような著者のスタンスが、「ギリシア思想と聖書の真理の総合」に本来不可欠なはずの論点、たとえば、不可知な神の本質に各位格の固有性の認識を介して限りなく漸近するというバシレイオス特有の方法論的主張と神の^{ウーシア}本質の可知性を主張するエウノミオスとの間に横たわるストア的エピノイア論の問題、近年 M. Barnes が精力的に論じている「三つのヒュポスタシス、一つの^{デュナミス}力」の問題、さらにそのようなデュナミス論には不可欠なプロティノスからの影響問題、こうした諸論点の軽視ないし無視をもたらしたと言っても過言ではないだろう。

以上、批判的コメントに終始してしまったが、それにもかかわらず、冒頭に掲げた「バシレイオスの三一神学の全体像を丹念に纏め上げた労作」という私の評価はいささかも揺るぎはしない。カッパドキア三教父の著作群を収録した *Patrologia Graeca* 10 巻分 6000 コラムの内、4 巻 2500 コラムを占める大バシレイオスの多様で複雑な姿を読み解くことは、本書のように穏当な読み筋を過不足なく集成し、細部にまで配慮の行き届いた研究書の手引きなしには極めて困難だからである。

Martin Rhonheimer

The Perspective of the Acting Person:

Essays in the Renewal of Thomistic Moral Philosophy.

Edited with an introduction by William F. Murphy, Jr.

The Catholic University of America Press, 2008, xxxix + 329 p.

井 上 淳

著者の Martin Rhonheimer (マルティン・ロンハイマー) は 1950 年スイスの

テューリヒ生まれ。歴史学、哲学、政治学を学び、テューリヒ大学にて政治哲学の Ph. D. を取得した。オプス・デイの会員であり、カトリック司祭である。現在ローマの The School of Philosophy of the Pontifical University of the Holy Cross で倫理学と政治哲学の教授をつとめている。ドイツ語、イタリア語、スペイン語などで書かれた数多くの著書があり、そのいくつかは英語に翻訳されている。本書は 1993-2006 年に学術雑誌に発表された倫理理論に関する論文を集めたものであり、イタリア語やドイツ語から英語に翻訳されたものも含まれている。また編者の William F. Murphy, Jr. による Introduction が付されており、Rhonheimer の略歴、基礎倫理学における彼の思想の発展、三つの主要著作の概要、そして収録された論文におけるいくつかの鍵となる主題についての解説が記されている。

収録された論文は、自然法や倫理的行為の根本問題について検討し、教皇ヨハネ・パウロ二世の回勅『真理の輝き』(*Veritatis Splendor*) の主張を擁護するものである。Rhonheimer は、トマス・アクィナスに代表されるカトリックの伝統的な倫理観を継承すると共に刷新しようとする立場をとり、目的論的倫理学理論を批判し、結果主義、均衡主義を斥けている。彼のアプローチは理性と自然本性の二分法の克服を目指すものである。人間の心に刻まれた自然法が倫理的行為の本質的原理であるが、その自然法を認識し自らの行為を決定するのは実践理性であるとし、自然法と実践理性の密接な関係を説く。また、トマス主義に立脚し、教皇回勅の教説を支持して、倫理的行為の理解のためには傍観者の視点ではなく行為者自身の視点に立つべきであること、そして、結果や均衡によるのではなく人間にとって常に本質的に善でありまた悪である行為が存在することなどが主張される。掲載されている論文はほとんどが極めて論争的であり、トマス主義の立場に立つ強力な論客という印象を受けた。以下簡単に、各論文の内容を紹介する。(1) 第 1 論文 “Is Christian Morality Reasonable?” は、世俗的人道主義とキリスト教人道主義の違いについて論じたものであり、キリスト教倫理は非理性的で非人間的であるという批判に対し反論する。キリスト教倫理は実際には達成不可能な事柄を要求しているように思われ、そのために非理性的で非人間的であるとみなされがちであるが、Rhonheimer は、視点を信仰・希望・愛に置くことにより、キリスト教倫理は真に理性的・人間的なものとして理解することができると主張する。

(2) 第2論文“Norm-Ethics, Moral Rationality, and the Virtues”は、結果主義者や均衡主義者たちが提唱する目的論的倫理學理論の誤りを指摘し論駁しようとするもの。これは教皇ヨハネ・パウロ二世の回勅『真理の輝き』(*Veritatis Splendor*)の基本的主張を擁護するものである。

(3) 第3論文“‘Intrinsically Evil Acts’ and the Moral Viewpoint”もまた、回勅『真理の輝き』を擁護するもの。結果主義者や均衡主義者たちが唱える目的論的倫理學理論、すなわち『真理の輝き』が批判している「そのために選択がなされる意図、あるいは関係するすべての人に対するその行為の予見できる結果の全体を考慮せずに、ある行動または特定の行為の熟慮された選択を、その種類——その『対象』に従って——道徳的に悪であるとみなすことは不可能であるとする」理論(『真理の輝き』79)の誤りを指摘し、いかなる場合においてもそのもの自体として本質的に悪であり善である行為の存在を主張する。

(4) 第4論文“Intentional Actions and the Meaning of Object”は、『真理の輝き』およびその主張を擁護する Rhonheimer の見解を批判した Richard McCormick の論文“Some Early Reactions to *Veritatis Splendor*”への返答である。『真理の輝き』において用いられている「対象」object および「意図的行為」intentional actions という語の意味を解き明かし、McCormick ら結果主義者・均衡主義者たちの主張に反論する。

(5) 第5論文“Practical Reason and the ‘Naturally Rational’”は、トマス・アクィナスにおける倫理的行為の原理としての自然法理論について論じたものであり、Rhonheimer の著作 *Natural Law and Practical Reason* (オリジナルはドイツ語, 1987年) に対する批判への反論である。実践理性と自然本性的傾向性との関係について、自分の立場が決して自然主義者のものではなく、真正にトマス主義的であることを主張する。

(6) 第6論文“The Moral Significance of Pre-Rational Nature in Aquinas”もまた、彼の *Natural Law and Practical Reason* への批判に対する反論である。前-理性的である自然本性と実践理性との関係について、Rhonheimer の見解はトマスの教説の正しい解釈ではないとする Jean Porter の批判に対して、彼女は自分の説を正しく理解しておらず批判は不当であると主張する。また Stanley Hauerwas が同性愛の弁護に自説を引き合いに出していることも不当であると主張する。

(7) 第7論文“The Cognitive Structure of the Natural Law and the Truth of Subjectivity”では、トマスにおける自然法の意味の解明が行われている。自然と理性を二分して捉える伝統的な解釈の問題点が指摘され、トマスの理論に基づいてその解決を探求する。自然法は倫理的行為の自然本性的な原理であるが、それは理性によって認識されて初めて心に刻まれた法として機能する。実践理性が自然本性的に人間にとって善であり悪であると捉える事柄が自然法の規定に属するのである。Rhonheimer は人間の行為における自然と実践理性の本質的な結びつきを強調し、二元論的虚偽からの克服を目指す。

(8) 第8論文“The Perspective of the Acting Person and the Nature of Practical Reason”は、トマス主義的人間理解に基づいて人間的行為の「対象」objectをどのようにとらえるべきかを論じたものである。これも『真理の輝き』の主張を支持するものである。人間の行為の道徳性は根本的に、熟慮された意志によって理性的に選択された「対象」に依拠している。それゆえ、行為を倫理的に規定するその行為の対象を捉えるためには、行為をしている人の視点に自らをおくことによって、すなわち一人称的な観点からそれを捉える必要があることが主張される。

(9) 第9論文“Practical Reason and the Truth of Subjectivity”は、倫理学における根本問題である行為者の主観性の真理について論じたものである。理性の判断する善や悪はどのようにしてそれが真理であることを保証されるのか。自然理性の光、永遠法の分有としての自然法と実践理性との関わり、キリスト教形而上学と倫理の関係などをめぐって、Rhonheimer のトマス解釈が述べられている。

(10) 第10論文“Review of Jean Porter’s *Nature as Reason*”は、題名が示すとおり Jean Porter の2004年の著作 *Nature as Reason: Thomistic Theory of the Natural Law* の書評である。Rhonheimer は、彼女のトマス解釈には種々の点において重大な欠陥や誤りがあり、とても Thomistic と呼べるものではないと、この著作を厳しく批判している。